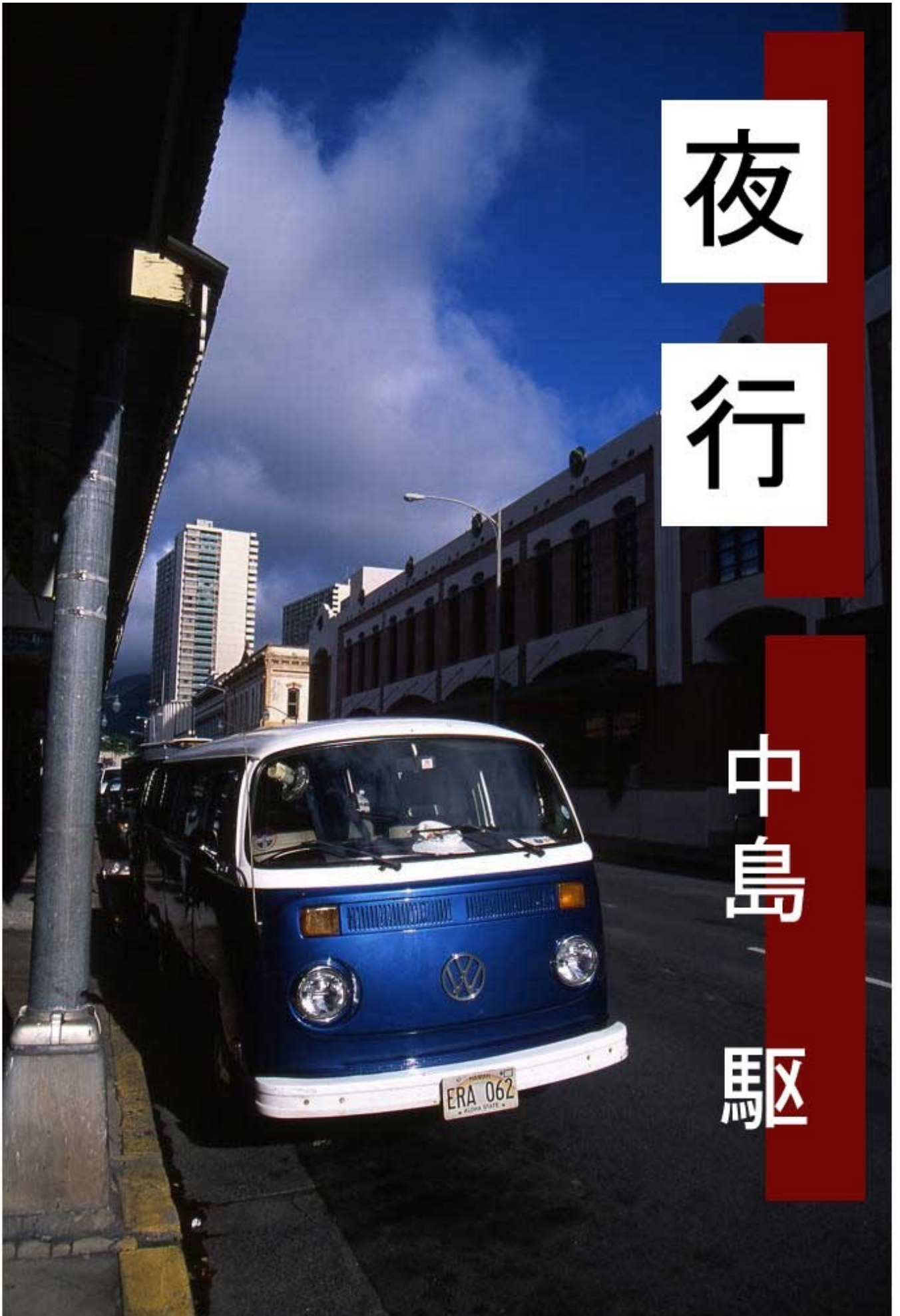


夜

行

中島

區



左腿にじわりと広がる湿り気を感じて、啓一は目を開けた。

蛍光灯のまばゆさに戸惑いつつ足元を見やると、「うわ、やっべえ」という声が頭の上から聞こえる。顔をあげると、短髪を真っ赤に染めた男が慌てた様子で立っていた。啓一と同じく新宿から乗り込んできた男で、バスの天井に頭が届きそうなほど背が高い。白のシャツにシンプルなグレーのスーツを着込んでいるが、ネクタイはしていない。ジャケットの袖は明らかに短くて、筋張った細い手首が覗いていた。待合所ではギターケースを抱えていたはずだが、どこにやったのだろう。ぼんやりとした頭で、啓一はそんなことを考える。

「ごめん、起こしちゃったな。ここ、狭くってさ」

そう声を掛けられて、ようやく啓一は、隣に座っていた男が自分の足元にコーヒーを零したのだと気がついた。どうやらバスは、休憩地点のサービスエリアに到着したらしい。おそらくは、男がバスから降りようと立ちあがった際に、その長い足でシートの背もたれに差してあった缶コーヒーをひっくり返してしまったのだろう。男のほうも濡れてしまったようで、しきりに自分の内股にハンカチを当てている。その様子を見る限り、悪気があったとも思えない。啓一はまだぼんやりとした頭を必死で回転させながら笑顔を作り、「大丈夫ですから」と答えた。「わりいなあ」と赤毛の男は、もう一度謝った。

なんとか目の焦点を合わせて、啓一は改めて男の顔を見た。茄子のようにつるりとした面長の顔立ちに、小さな丸い目と、その上に太くて短い眉が垂れ下がっている。鼻から下がしゃくれて極端に前に飛び出しているような印象で、その顔はいつか動物園で見かけたマレー猿を思い起こさせた。ミュージシャンというよりも、肉体労働が似合いそうなタイプだなと、啓一は心の中でつぶやく。

「すっかり濡らしちゃったな、わりい、わりい」

男は窮屈そうにからだを折り曲げて、啓一のジーンズをハンカチで拭った。思わず足を引っ込めた啓一を無視して、男は何度も丁寧に汚れを落とそうとする。男が手を動かすたびに、男の整髪料の香りが啓一の鼻先を掠めた。啓一も自分のハンカチを取り出して、腿を拭う。

「おっと」と男がつんのめったのは、二人がかりでジーンズの汚れをあらかた拭い去ったときだった。起きあがろうとしたところを、通路を通り抜けようとした誰かと接触したらしい。男を突き飛ばしたのは薄灰色のダウンコートを着た女で、すでに乗降口から外へ出ようとしていた。明るい栗色の髪がバスのドア越しにちらりと見えて、すぐに啓一の視界から消える。

「なんだあ、あの女」

男は乗降口に向かってそう毒づいてから、ふたたび通路に立ちあがり、啓一に向かって細長い手を差し延べた。

「俺、水嶋。水に山鳥。よろしく」

女を気にしながら、仕方なく啓一も手を伸ばす。

「渡辺です」

握手を交わすと水嶋と名乗った男は、さっさとバスを降りていった。他の乗客があらかた降りるのを見届けてから、啓一もバスを降りる。

二月の真夜中だけに、外は凍えるほどに冷えていた。乗車時に降っていた雨は上がっていたが、パーキングの路面はまだ黒く濡れている。携帯電話を取り出して時刻を確認すると、午前二時だった。車内は満席ということもあってかひどく暑く、眠っているうちに汗をかいたらしい。湿った首もとに寒風が当たると、痛いほどに応える。マフラーを車内に残してきてしまったことを、啓一は今さらながら悔やんだ。乾いたと思ったジーンズもみるみる冷たくなっていく。慌ててトイレに駆け込んでもう一度、ハンカチで腿を拭き、用を足す。少し迷ってから、自動販売機でホットココアを買い、ポケットに突っ込む。

サービスエリアの食堂は人影もまばらで、厨房の電気も落とされているため薄暗い。手近の椅子に腰をおろすと、啓一は脚を伸ばして思いきり伸びをした。続いて、ふくらはぎを両手でゆっくりと揉みほぐす。ひと心地ついてから、今度は立ち上がって二三度、屈伸運動を繰り返した。出発時間まで十分足らずしかないので、今のうちにできるだけほぐしておきたい。からだを動かせば、少しはジーンズの乾きも早くなるだろう。

啓一を乗せた名古屋行き的高速バスは、定刻どおり、午後十一時三十分に新宿を発車した。それから二時間半ほどしか経過していないにもかかわらず、からだがかたくなる。

平日の夜だというのに座席はすべて埋まっていて、乗り込んですぐに啓一はこの深夜バスを選んだことを後悔した。格安が売りのそのバスは、観光客向けの車体をそのまま流用したもので、シートの間隔が驚くほど狭い。身長が百七十センチほどしかしかない啓一でさえ、座ると前の座席の背もたれに膝がついてしまう。さらに前列の客が背もたれをいっぱい倒したおかげで、背もたれとシートの間で膝ががっちり挟まれる格好になってしまった。横に逃げようにも、隣には赤毛の水嶋が座っている。啓一は脱いだ上着を頭からかぶって無理やり眠ろうとしたが、寝つけるわけもない。結局、水嶋にコーヒーをかけられて目を開けるまで、うつらうつらとしながら、ぼんやりと時を過ごした。

ひととおりからだを動かすと、啓一はふたたび携帯電話を開き、バスに乗り込む直前に送られてきたメールに目を通した。差出人は父からで、名古屋への到着時間を尋ねるものだった。どうやら最寄り駅まで車を寄こすつもりらしい。

ここ半年あまりで、啓一が実家に帰るのはこれで三度目となる。就職活動にことごとく失敗した啓一は、年が明けても内定が決まらずに留年することになった。うろたえたのは父のほうで、以来、何かにつけて連絡を寄こすようになった。もともと寡黙な人で、上京以来、啓一はまともに口をきいた記憶がほとんどない。いっそメールを削除してしまおうかと思ったが、到着時間だけを簡潔に記した返事を送り返して、啓一は携帯電話を閉じた。そして椅子から腰をあげて、大きなあくびをしながら伸びをした。吐き出した息が目の前で白く濁り、視界がぼんやりと霞む。

ストレッチを続けながら外に目をやると、啓一が乗ってきたのと同じようなバスが何台も停車しているのが見えた。そこでようやく、啓一は自分のバスがどんな色やかたちをしていたのか、まったく覚えていないことに気づいた。早足で駐車場まで出ると、しばらく呆然と立ち尽くす。「おい、こっちだ」と声を掛けてきたのは水嶋だった。十メートルほど先に停まっている白色のバスの前に、赤い髪がぼかりと浮かんでいる。バスの乗降口まで走り寄って、啓一は水嶋に礼を言った。水嶋はそれに笑顔で応える。笑うと眉毛がますます垂れ下がって、その顔は泣き笑いのような表情になった。髪さえ赤くなければ、おそらくは人事部の受けも良いだろうにと考えて、啓一は苦笑いする。水嶋はおどけた調子でドアの前に立つと、ステップへ向けて長い右腕を伸ばし、啓一に中へ入るように促す。白色のバスを背にして立つ姿を見て、啓一は初めて、水嶋がグレーではなく、黒色の礼服を着ていることに気がついた。

「それ、結婚式？」

座席に戻ると、啓一は思いきって水嶋にそう訊いてみた。

「うん、ああこれか」

水嶋は上着の襟元を摘んでみせる。

「違う。葬式」

水嶋は短く答えた。心なしか、表情も硬い。啓一は上着を脱ぐ手を止めて、しばらく水嶋の顔を見つめた。それから啓一は「ああ」と小さく呟いて、水嶋から視線を逸らした。そうしたほうが良いような気がして、脱ぎかけた上着を、もう一度羽織りなおす。

「そうそう、これ」

しばらくの沈黙のあと、水嶋はジャケットのポケットから缶コーヒーを取り出し、啓一に差し出した。

「さっきのお詫び、な」

少し躊躇した啓一の表情を気取ったのか、水嶋は「コーヒー、嫌いか？」と続ける。

啓一は小さく首を横に振って「ありがとう」と返した。缶コーヒーを受け取り、上着のポケットにねじ込む。先ほど買ったばかりのココアと缶コーヒーとがポケットの中でぶつかり、こつんと小さな音を立てた。

やがて運転手が乗客の人数を確認し、バスはサービスエリアを後にした。あと二箇所休憩を入れるというアナウンスが流れ、車内灯が落とされる。窓はもちろん、運転席と客席の間にもカーテンが引かれているため、車内はたちまち真っ暗になった。それでも仄かに明るさを感じるのは、数人の乗客が、暗闇の中で携帯電話の画面に見入っているせいだった。青白い光に下から照らされ、彼らの横顔は一様に、幽霊のように気味悪く啓一の目に映った。前の客は相変わらず、ぎりぎりまでシートを倒そうと踏ん張ってくる。サービスエリアでのストレッチも空しく、啓一の膝はたちまちのうちに痺れてきた。上着を脱ぎそびれたせいもあって、車内の暑さもいっそう厳しく感じる。こめかみを汗が流れた。目をつぶっても、やはりどうにも寝つくことができなかった。

だから「おい、起きてるか」と水嶋が声を掛けてきたのは、サービスエリアを発ってどれくらいの時間が過ぎてからのことか、啓一には判然としなかった。目を開けると、すぐ横に水嶋の顔が近づいていて、啓一は怯む。

「お前さっき、誰の葬式なのかって訊いたよな」

そこまで踏み込んだ質問をした覚えは啓一にはなかった。否定するのも億劫だったので何も答えずにいると、水嶋はそれを肯定の意味と捉えたいらしい。言葉を続けた。

「おとといの夜、名古屋から連絡があったんだよ。高校のときの連れが死んだって」

水嶋は啓一から眼を離して前に向き直り、「ふう」と溜息をついた。そして「早いよなあ」といって、耳の後ろあたりをぼりぼりと掻いた。水嶋の声が思った以上に大きく響いたため、啓一はひやりとする。

案の定、啓一の前の席の男が、聞こえよがしに咳をしてから、シートを何度かどすりと突いてきた。静まり返っているものの、この息苦しい車内で眠りにについている人間がいるとは思えない。前の男の咳払いを合図に、あちこちでがさごそと衣擦れの音が鳴った。それらが苛立ちを含んでいることは明らかだった。しかし、水嶋は一向に気にする素振りを見せることなく話を続けた。

「でも、じつを言うと、そんなに仲が良かった奴でもないんだよ。何で死んだのか聞いたとき、思わず笑っちゃったもんな、俺」

そう言うと水嶋は、ほんとうに「ひっひ」と笑った。前の男がふたたび、どすりとシートを突いた。水嶋は、前の席の男にちらとその長い顔を向ける。啓一は、自分の脇の下に汗が垂れるのを感じた。

「そいつさ、何で死んだと思う？」

水嶋が水に向けてきたが、啓一は思うように声を出せなかった。ようやく「さあ」とだけ答えてみたものの、それが水嶋まで届いているかどうかは甚だ疑問だった。いっそ聞こえなければ自分が眠ったと思うかもしれないと期待したが、水嶋はかまわず先を進める。

「凍死だってさ。なあ、びっくりだろ。そいつ、クラスでも出世頭でさ。けっこう有名な大学出て名の通った会社でバリバリ営業やってたんだぜ。たしか何年か前に結婚もしててさ、子供もいてさ、俺なんかと違って、立派な社会人だよ」

「立派な社会人」という言葉が赤毛の水嶋から出てくるのが、啓一にはひどく滑稽に思えた。と同時に、自分が「立派な社会人」となって、「バリバリ」と働いている姿を想像してみた。携帯電話を片手に忙しくオフィス街を立ち回るビジネスマンとなった自分を思い浮かべ、啓一は少し

だけ気分が昂ぶる。

「それが凍死だよ凍死。しかも街の真ん中で。その日は飲み会で酔っ払って、終電逃したらしくってさ。タクシー代けちって歩いて帰ろうとしたらしいんだよな。家まで十キロぐらいの距離だったらしいんだけど、その途中で倒れてたって。初めのうちは何かの事件に巻き込まれたんじゃないかって話だったけど、外傷とかとくになくて、たんに凍え死んだんだって。ありえねえよな、いまどきそんな死に方」

たしかに啓一にも、この日本で凍死する人間がいるなどとは俄かに信じられなかった。先ほどのサービスエリアも寒くはあったが、もちろん死ぬほどではない。仮に凍えそうだったとしても、その気になれば、途中でタクシーを拾うことなどいくらでもできたはずだ。それに、道端には腐るほど温かいコーヒーも売られている。そう思いながら、啓一はポケットの中の二つの缶を指で触ってみた。暑苦しい車内にあって、それらは温くなるどころか、ますます熱気を帯びているように啓一には感じられた。

「自殺……とか？」

水嶋に、というより自分自身に向けて、啓一は小さな声で問うてみる。それを聞いた水嶋は、腕組みをして考え込むような素振りを見せてから言った。

「それはないんじゃないかな」

啓一が何も答えずにいると、水嶋は「うん、ない。それはない」ともう一度、今度は自分に言い聞かせるように呟いた。

「自殺にしては、なんつーか、面倒臭いだろう」

「面倒臭い」という意味が瞬時に啓一には掴みかねたが、要するに、自殺にしてはあまりに段取りが多すぎるし、偶然に頼りすぎているということだろう。

「でもまあ、変死ではあるよな。変てこな死、ではある」

そう言うと水嶋は、またも考え込む仕草をした。カーテンの隙間から時折入り込むオレンジの光が、水嶋の顔を一瞬だけ照らしては消える。光が差し込むたびに、マッチを擦ったように、水嶋の赤毛がぼっと闇の中に浮かびあがった。

水嶋のシルエットを窺いながら、昔見たホラー映画に、似たような場面があったなと啓一はぼんやりと思った。深夜のドライブを愉しむ二人の男が出てきて、助手席の男が「この世で考えられるいちばん怖いもの」を挙げていこうと提案する話だ。細部は忘れたが、たしか助手席の男がモンスターに豹変し、ドライバーの男を食い尽くしてしまうという落ちだったと思う。

「そういえば、俺に連絡をくれたのが誰だったか話したっけ」

水嶋は、しばらくぶつぶつと独り言を繰り返したあと、ふたたび啓一に水を向けてきた。舟を漕ぎかけていた啓一は、辛うじて首を横に振って答える。

「同じクラスだった女の子なんだけどさ。驚いたのはさ、彼女、連れを殺したのは自分だって言うんだよ」

「殺した？」

話の展開に着いていけず、啓一は思わず聞き返す。

「だから俺も驚いたんだよ。外傷はないし、そもそも始めに事件性がないって説明してくれたのは彼女なんだからな。それが急に自分が殺した、だぜ。さすがに面食らうよな」

そう言いながらも、水嶋はどこか楽しげな口調だった。啓一は、水嶋の白い歯が、くっきりと闇に浮かぶのを見たような気がした。

「彼女と連れはさ、まあ、不倫してたみたいだな。仕事がバリバリできる奴は、女にもバリバリもてる。うらやましいな、まったく。で、死んだ連れはあの夜、どうやら彼女のところに行くはずだったらしい。彼女は連れの子を身ごもっていて、急に産気づいたんだそうだ。とはいえ、妊娠していることは、周囲には秘密にしていたらしい。一人暮らしとはいえ、彼女は実家の近くに住んでいたし、まして田舎だから周りの目も厳しい。結婚前の娘が不倫のあげくに妊娠しましたなんてなったら、何を言われるかわかったもんじゃないからな。なあ、お前もそれぐらいはわかるだろ？ よくばれなかったもんだと思うけど、とにかくずっとばれなかった。だからその晩も、病院へは行かずに連れの携帯に電話を掛けた」

明らかに興奮した様子で、水嶋はそこまで一息に喋った。長い顔の影が忙しく動くたびに、唾が飛沫となって飛散する。窓から差し込む光に、水嶋の唾がキラキラと反射した。

「ところが、連れがたどり着く前に、彼女はトイレで赤ん坊を産み落としたんだそうだよ。でも赤ん坊はすぐに死んだ。死産だったのか、彼女が殺したのか、それはよくわからない。さすがにそこまでは彼女も話さなかったし、俺も突っ込めないしな。とにかく彼女は赤ん坊の死体をタオルで包んでコンビニ袋に入れて、連れが来るのを待った」

車内の暑さも手伝って、水嶋の話聞きながら啓一は軽い吐き気を催した。目の前に迫るシートから異臭が発せられているような気がして顔を背けるが、生臭さが鼻腔から離れない。もしかしたら、その臭いは自分のからだから漂っているのかもしれないと啓一は思った。想像しないように気を逸らそうとするほど、真っ黒な塊りが目の前の闇の中に映し出される。どうやら前の客も聞き耳を立てていたようで、からだを落ち着きなく右に左に動かし始めた。水嶋はなおも続けた。

「そのうち連れがやって来て、彼女は赤ん坊の死体をどこかに捨ててきてほしいと頼んだらしい。連れはずいぶんショックを受けていたようだけど、しばらくしてコンビニ袋を手には彼女の部屋から出て行った。彼女が、自分が殺したって言うのはここからで、連れが出て行ってすぐ、彼女は部屋の鍵を掛けちゃった。連れはもちろん合鍵を持っているから、しっかりチェーンロックまで掛けたらしい。一時間ほどしてドアのチャイムが鳴っても、彼女はドアを開けようとはこれっぽっちも思わなかったそうだ。チェーンロックの間隙から連れの声が聞こえたんだけど、いっさい無視した。怒りが湧きあがってきてどうしようもなかったと、彼女は俺に言ってたよ。女って、怒らせると怖いよな」

へらへらとふざけたようにこちらに顔を向ける水嶋の顔は、黒く縁取りされていて、啓一にはその表情が読めなかった。まるで赤い髪と歯だけの得体の知れないものがにじり寄って来るような気配だけがあった。前の客がふたたび大きく咳払いをした。水嶋は前方のシートの背もたれの角を右手で掴むと、少し身を乗り出し、あたかもその客に語りかけるように喋り始めた。

「どうせ、連れは自分の家にでも帰ったと思ったんだろう。やがてチャイムの音はしなくなって、彼女はそのまま朝まで寝てしまった。なにせ赤ん坊を産んだばかりだしな。体力ももたなかったんだろうよ。目を覚ましてみるともう朝で、外がどうも騒がしい。なんとか起きあがってベランダから様子を見ると、すぐ傍のコンビニに人だかりがしてた。パトカーや救急車も来てる。彼女は嫌な予感がして着替えて外へ出た。そしたら、ちょうど救急車に誰かが運び込まれていくところで、担架から見慣れたコートの裾がはみ出してるのが見えた。彼女は運ばれていく男が連れだって、一発でわかったらしい」

前席の男は無視を決め込んだらしく、窓のほうに顔を向けたまま反応しようとしなかった。水嶋は自分のシートに座りなおして、話を続ける。もはや車内の誰もが、水嶋の話に耳を傾けているように啓一には思えた。

「それからすぐに部屋に引き返して、しばらくの間、彼女は警察がここへ来るんじゃないかとびくびくしていたそうだ。そりゃそうだ、連れは赤ん坊の死体を持っていたはずだし、状況は明らかに変死だからな。ところが一向に誰も訪れる気配がない。それで彼女は意を決して、連れの家まで行ってみたいらしい。連れは実家の離れに家を建てて住んでいて、もちろん彼女はそれを知っていた。離れに近づくのはできなかったけど、母屋のほうを窺っていたら、明らかに様子が変わった。ちょうど見知った顔の女が出入りしてたところに出くわしたもんだから、彼女は素知らぬ顔でその女に何があったのか話を聞いたらしい。それで連れの死を知ったというわけだ」

「でもさ」と水嶋が話を継ごうとしたとき、突然、背後から音楽が聴こえてきた。誰かの携帯電話の着信音かと思ったが、ズンズンというその低音は、徐々に近づいてくる気配があった。しばらくすると、カーステレオを大音量で流しながら、一台の車がバスの横を通り過ぎていった。爆音の後の静寂は、いっそう車内の空気を重たくしたように、啓一には感じられた。話の腰を折られたのが気に入らないのか、しばらくの間、水嶋も息を潜めていた。

「でも連れの死よりも、そのときの彼女が気がかりだったのは赤ん坊の死体のほうだ。そっちが見つかればもっと大騒ぎになる。連れが倒れていたコンビニの駐車場にはさすがに近づけなかったらしいけど、ベランダから覗いてみると警察の現場検証なんかも終わったようで、店は通常通り営業していたらしい。結局、夜になっても誰も彼女の部屋を訪れることはなくて、高校の同窓会委員とかいう奴から電話が一本掛かってきただけだった。もちろん連れの死を伝える電話で、彼女はそこで初めて、死因が凍死だったことを聞かされたらしい。赤ん坊のことは聞くことができなかったけど、事件性がないということも、おそらくそのときに聞かされたんだろう」

腐れかけた赤ん坊の死体を想像して、啓一は本格的に気分が悪くなった。咄嗟にジーンズのポケットからハンカチを取り出して口に当てる。すると突然、胸元で啓一の携帯電話がぶるぶると震えだした。慌てて取り出そうとして手が滑り、啓一は携帯電話を取り落とした。電話は水嶋の足元に落ちて震え続けた。お互いが拾おうと手を伸ばしたため、啓一と水嶋は床近くで顔を近づけ合うかたちになる。水嶋は小声で言う。

「じゃあ、赤ん坊はいったいどこへ消えたんだ？ 一番考えられるのはコンビニのゴミ箱の中だ。でもああいうところのゴミ箱は、一日に何回も回収するもんだろう。死体が入ってたらすぐわかるはずだ。でもそういった様子もない。そこでいたたまれなくなった彼女が連絡を取ったのが、俺、というわけだ。仲は良くなかったけど、確かに俺は死んだ連れとそこそこ付き合いがあったし、高校のときはどっちかっていうと彼女のほうと仲が良かったからな。でも数年ぶりに電話が掛かってきて、いきなりそんな告白をされたときはさすがに参ったな」

水嶋の声には怒気が混じっているように、啓一には思えた。あまり水嶋を刺激しないよう気を配りながら、窓際からだを向けて啓一はそっと携帯電話を開く。それは、父からのメールだった。ざっと目を通して、ぱたりと折りたたむ。水嶋はかまわず話を続けた。

「しかも彼女はたんに事の顛末を俺に聞かせたかったわけじゃない。赤ん坊の行方を捜して欲しいって言うんだよ。一度こっちに帰ってきて、赤ん坊を捜して欲しいって。どうして俺にそんな役目を振ってきたのか、ぜんぜんわかんねえ。正直にそう言ったら、彼女、なんて言ったと

思う」

水嶋は闇に向かってそう問いかけた。その様子は、もはや啓一が存在すら忘れていたかのようだった。それでも啓一は、首を横に振って、わからないという素振りだけはしてみせた。

「それがよお」

水嶋はそこでいったん言葉を区切り、大きく息を吸った。

「自分にもわかんねえんだってさ」

そう言うと水嶋は、自分の右斜め前のシートを思いきり蹴り飛ばした。啓一の前の客の頭が大きく前に跳ね上がって、「うぐ」という声にならない呻きが洩れた。あっけにと取られている啓一をよそに、水嶋は何ごともなかったかのようにシートに座りなおす。後ろを振り返った男は、水嶋の顔を睨んでいるようだったが、その表情は啓一の側からはよく見えなかった。白っぽいシャツにネクタイがぶら下がっているのだけが、辛うじて確認できた。

そのまま殴り合いになるかもしれないと、啓一は内心、冷や汗をかいたが、男は何も言わずに自分の席に向き直った。だが、すぐにどんという鈍い音がして前のシートが大きく揺らいた。その振動であやうく啓一は、背もたれに鼻を打ちつけるところだった。咄嗟に身を引くと、頬を伝って汗が一滴流れ落ちた。

「で」と、水嶋は平然と言葉を継ぐ。

「俺は今ここにいるというわけだ。東京から名古屋まで、俺は赤ん坊の死体を捜すために移動している」

水嶋が話を終えるのと同時に、バスは次のサービスエリアへと辿り着いた。啓一は一刻も早く外の空気を吸いたくて、水嶋の脇を抜けて駐車場へ降りた。雨がぱらついていたが、かまわずに休憩施設を目指して走る。真っ先にトイレに駆け込むと個室に入って鍵を閉め、胃の中の物を何度か吐いた。トイレットペーパーで口元を拭い、鼻をかんで捨てる。便器の蓋を閉じて座り込むと、ようやく少しだけ落ち着いてきた。

「なんなんだよ、あいつ」

思わずそう呟いて、啓一は目の前の扉に目を向ける。扉には下手くそな文字で「右を見ろ」と書かれてあった。右の壁に目をやると今度は「うしろを見ろ」と書いてある。あまりにありふれた落書きに、啓一は力なく苦笑いを浮かべた。

顔を洗って外へ出ると、思いの外、冷気が心地よく感じた。バスに戻ろうと駐車場へ踏み出すと、啓一の数メートル先に、先ほどのサービスエリアで水嶋を突き飛ばした女が突っ立っている。どうやら自分のバスがどれかわからなくなったようで、不安げに、顔を左右に泳がせていた。啓一は少し迷ってから女に近づいた。

「もしかして、バスがわからなくなりました？」

啓一が声を掛けると、女は振り返って、いぶかしそうな顔を向けてきた。駐車場を照らすオレンジの光と崩れかけた化粧のおかげで、女の顔はひどく疲れきっているように見えた。少し垂れた目元と厚ぼったい唇には幼さが残っていて、啓一とそれほど年は離れていないように思えた。

「名古屋行きの白いバスだよ」

女が警戒しているのは明らかだったので、啓一は女と少し距離を置いて、自分の乗ってきたバスを指差した。女の表情が、ぱっと明るくなる。

「ありがとう。助かった」

女は、啓一のほうを向いて短く礼を言った。

「いや、僕もさっきのサービスエリアで迷ったから」

言い訳がましく啓一が答えると、女が「きゃっ」と悲鳴をあげた。啓一は自分が何かとんでもない間違いを犯したのかとうろたえたが、女の目は啓一の背後の休憩施設に向けられていた。啓一も釣られて振り返ると、飲食エリアとトイレの間の通路で、二人の男が揉み合っているのが目に入った。一人は赤毛の男で、水嶋に間違いなかった。もう一人はスーツにネクタイを締めたビジネスマン風の男だった。啓一は慌てて二人のところまで駆け寄り、相手の男の腹を蹴り上げようとする水嶋を、後ろから羽交い絞めにした。

「おい、なにやってんだよ」

知らず知らずのうちに、啓一も荒っぽい口調になる。

「なにって、こいつがイチャモンつけっからよ」

水嶋は血走った目を啓一に向けて答えた。相手の男は、壁にへばりついたまま動かない。口元をぱくぱく開けて何か言いたそうにしているが、うまく言葉が出てこないようだった。

まだ殴りかかりそうな勢いの水嶋を押さえ、啓一は壁の男に早く消えるように目配せした。男はネクタイの結び目を整えながら、駐車場へと走り去っていった。

「あの野郎、さっきのことで文句言いなきやがった。ったくよお」

まだ荒い息を吐きながら、水嶋が言った。

「さっきのこと？」

「シート蹴ったろ」

「え、じゃあ、僕の前の席の人か、あの人」

そう言うと、水嶋は呆れたように笑った。

「当たり前だろう。いくら俺でも見ず知らずの奴と喧嘩なんかしないぜ」

水嶋は礼服についた汚れを叩きながら嘯く。

「先に吹っかけたのはお前のほうだろう」と啓一は口に出したかったが、やめておいた。携帯電話を開くと、バスの発車時刻まであと数分しかない。水嶋を促して、啓一は駐車場へ足を向けた。女の姿はもう見えなかった。

バスへ戻ると、啓一は真っ先に女を捜した。女は後部近くの座席に座って、携帯電話の画面を開いていた。幾分ほっとして、啓一は水嶋といっしょに自分の席に向かう。ちらと前の席の男に目を向けると、男はスーツの上着を頭からすっぽりと被って顔を隠していた。シートの背もたれがまったく倒されていないのを見て、啓一は思わず水嶋と顔を見合わせる。水嶋は得意気に笑みを浮かべた。

運転手が乗客の数を数え終わると、バスはふたたび発車した。

シートの中に少しばかり余裕ができたせいで、啓一はようやくリラックスすることができた。水嶋も喋り疲れたのか、隣でごうごうと鼾をかいている。水嶋の鼾は不思議と不快に感じなかった。むしろ意外に心地よく、啓一は水嶋の鼾の数を数えながら、まどろんだ。

最後のサービスエリアに着いたとき、目が覚めると、すでに水嶋の姿はなかった。前の席の男は、相変わらず上着を被ったまま微動だにしない。啓一は、先ほどのサービスエリアで用を足すのを忘れていたことに気づき、バスを降りた。寒さは相変わらずだが、多少眠って体力が回復したせいか、それほど気にはならない。

トイレを済ますと、啓一は休憩所の飲食スペースの扉を開けて中に入った。座席に余裕ができたといっても、まだからだの節々が凝っていて、膝も痛んだ。啓一は適当な椅子に腰掛けて足を伸ばし、それから靴を脱いで足の裏を揉んだ。視線の先には自動販売機が見えた。啓一は靴を履いて立ちあがろうとしたが、ポケットの中に二缶入ったままだったことを思い出して、また席に座り直す。ポケットを探ると、ココアもコーヒーも温くなっていた。

「ここ、いい？」

背後から急に声を掛けられて、啓一はびくりとする。見ると、ダウンコートの女が啓一の後ろに立っていた。手近な椅子を薦めると、女は、テーブルを回りこんで啓一の正面に座った。化粧を直してきたのか、女の顔は先ほどよりも美しく見えた。啓一は少しどきまぎする。

「さっきはどうもありがとう。おかげで、置いてかれなくて済んだ」

女は啓一に向かって、小さく頭を下げた。啓一も「いえ」と頭を下げる。

「僕も最初は迷ったから。隣の席の奴に教えてもらわなかったら、最初のサービスエリアで置いてかれてた」

「隣って、あの赤い髪の人？」

「そう」と啓一は答えた。女の顔に一瞬、緊張が走ったような気がした。

「知り合いなの？」

矢継ぎ早に女は質問してきた。啓一は、たまたまいっしょになっただけだと教えた。女の質問の狙いがよくわからず、啓一はだんだん鬱陶しくなってきた。女は少し考えるような仕草をしてから「大学生、だよな？」と話を変えた。

「四年」と言って、「キミは？」と啓一は返した。

「あたしは学生じゃないよ。これから名古屋の友だちの家に遊びに行くの」

「へえ」と啓一は適当に相槌を打った。女の答えは、どこか言い訳めいて聞こえた。

話がそれきり途絶えてしまい、啓一はなんとはいなしにテーブルに置かれた女の手を見やる。女の爪には派手なネイルアートが施されていた。着け爪なのか、左手の中指と薬指だけが、模様が違っている。中指と薬指の間に、引っかけ傷のような痕が縦に走っているのが遠目にもわかった。

啓一の視線を悟ったのか、女は左手をテーブルの下に降ろした。それから意を決したように啓一へ視線を向けて言った。

「お願いがあるの。ていうか、助けて欲しいの」

突然の女の申し出に、啓一は戸惑いを隠せなかった。啓一が言葉を探しあぐねていると、女はそれにかまうことなく喋り始めた。

「じつは今あたし、ストーカー、ていうか元カレなんだけど、しつこく付きまとわれちゃってて。彼とは飲み会で知り合って。あたし、たまたま行けなくなった友だちの代わりに出ただけど、なんか意気投合しちゃって。そのまま付き合い始めたんだけど、すぐに暴力振るわれて。最初は平手だったんだけど、そのうちグーになって。腹蹴られて。友だちに聞いたら、彼、札つきのDVだって。前の彼女もボコボコにしたらしくて。しかもまだその彼女にもつきまとしてたらしくて、郵便受けに生ゴミ放り込んだり、猫の死体とか入れたり、めちゃめちゃ嫌がらせしてた。それ聞いてあたし、即行逃げたんだけど、すぐ見つかったちゃって。また連れ戻されて。何で逃げんだって、もっと殴られて。フルボッコにされて。もうなにがなんだかわからなくなっちゃって。そうしたら、シェルターってところがあるからそこに駆け込みなよって、バイト先の子に言われて。紹介されたところに行ったらすぐに保護されて、部屋も引っ越して。そのときはよかったんだけど、一ヵ月ぐらいしてから部屋に帰ったら荒れ放題で。むちゃくちゃになって。郵便受けにやっぱり猫の死体が入ってて。頭狂いそうになって。もう遠くに逃げちゃいたくて。そうしたら昨日、たまたま昔、バイトでいっしょだった女の子が名古屋に住んでるから来なよって言ってくれて。それでもう、とにかくバスに乗ろうって。乗って名古屋に行こうって」

女はそこまでをひと息に話した。目には涙が浮かんでいた。だがそこまで聞いても、啓一が彼女にしてやれることなど何も無いように思えた。途方に暮れる啓一を前に、女はハンカチを取り出して涙を拭いた。

「でも無駄だったみたい。やっぱ、勘づかれちゃった」

「どういうこと？」

啓一は尋ねる。

「いっしょのバスに乗り込んできたのよ。顔見てびっくりしちゃった。まさかここまで追っかけてくるなんて」

女はそう言うと、力なく肩を落とした。啓一は思わずバスのほうを見やる。

「どこに座ってるやつ？」

聞いてみてどうなるものでもなかったが、啓一は女に尋ねてみた。女は少し躊躇うような素振りを見せたが、「あの赤毛の男よ」と告げた。

「ほんとうに？」

啓一は驚いて問い返す。

女はこくりと肯いた。

「だから、名古屋に着いたときに、なるべくあの男を引き止めておいてほしいの。あたしが消えていなくなるまで」

「でもあの男は、知り合いの女の子に頼まれて、赤ん坊を探しに行くって言ってた。人違いじゃないの」

はたしてここまで話していいものかという迷いはあったが、啓一は思いきって女にそう告げた

。

「ギターケース持ってたでしょ？」

唐突に女は言った。

「あの中に赤ん坊も入ってるの。猫の死体もあのケースに入れて持ち運んでたらしいから、きっとそう」

そう言うとき女はしばらく、自分の左手の傷痕を右手で擦っていた。

啓一には、女が本当のことを喋っているのか、嘘をついているのか、うまく判断がつかなかった。もしかしたら、水嶋と女はグルで、二人して自分を担ごうとしているのかもしれない。そんな警戒心を、啓一は抱かすにはいられなかった。

女はようやく啓一のほうへ目を上げると、ふいに表情を硬くする。啓一の背後を気にしているようで、女は「じゃあ」と言って立ち去ろうとした。後ろを振り向くと、ちょうど休憩所に向かって歩いてくる水嶋が見えた。女は水嶋の入ってくる方向とは逆の入り口に向かって足を運ぼうとしたが、立ち止まって、ダウンコートのポケットから缶入りのミルクティーを取り出した。

「これ、さっきのお礼」と言って、女はミルクティーをテーブルの上に置いた。一瞬のことで、断る暇もなかった。

女と入れ違いに、水嶋が休憩所に入ってきた。啓一の姿を認めると、長身をゆらゆらと揺すりながら近づいてきた。

「ちょっとそこらを走ってみたんだけど、すげえ、寒いのかな、いや、痛え。耳がもう、ちぎれそう」

両耳をごしごしと両手でしごぎながら、水嶋はそう言った。

「でもさあ、途中ですごく気持ちよくなった。すごく気持ちよくて、眠くて眠くてどうしようもなかった。映画の冬山のシーンなんかで、遭難した奴らが『寝るな、寝たら死ぬぞ』なんて励まし合ったりするけれど、ああ、このことか、って思ったよ。すんげえ、気持ちいいもの。ありゃ、眠りたくもなるわ」

水嶋はさきほど女が座っていた椅子に腰掛けた。そして、何かに納得したように「そうかあ、気持ちいいのか」と呟いた。

啓一は、先ほどの女との会話を掻い摘んで水嶋に話した。

「彼女は、あなたがストーカーだと言ってる」

水嶋はきょとんと呆けた顔をした。窓の外に、バスへ向かう女の姿が見えた。

「あの女がそんなことを？」

啓一が肯くと、水嶋は腹を抱えて笑い出した。

「まさか、そんなことありえねえよ。あんな女、さっき初めて会ったんだぜ。ていうか、顔だっ
てまともに見てないぜ、俺」

「ほんとに？」

「ああ」

それでも啓一は、水嶋への疑いを拭い去ることができなかった。

「ギターケースの中に、赤ん坊の死体を入れてるって」

「なんだよ、そりゃあ」

八の字に下がった眉毛をますます下げながら、水嶋は困ったようにそう言った。啓一もそれ以上女の話をするのが馬鹿らしくなって、口をつぐんだ。

「なあ、俺、決めた」

しばらくの沈黙のあと、水嶋が口を開いた。

「やっぱ、帰らねえ。バスもここで降りる」

「降りるって、この先どうするんですか？」

「わかんねえけど、まあ、なんとかなるよ」と言って、水嶋は天井を仰いだ。

啓一は携帯電話を開いて、バスの発車時刻を確かめた。発車まで、あと五分不足しかなかった。

「じゃあ、僕は行きます」

啓一は水嶋に向かって、そう断りを入れた。

「ああ」と水嶋は答え、啓一に軽く手を振った。

「それじゃあ」と言って、啓一がテーブルを離れようとする、すぐに後ろから「おい」と水嶋の声がした。

「忘れもの」

啓一が振り返ると、水嶋はテーブルのミルクティーを投げて寄こした。ミルクティーは綺麗な放物線を描いて、啓一の手にとまった。「ありがとう」

啓一はミルクティーを水嶋に向けて掲げ、缶を二三度振った。

「どういたしまして」と水嶋はおどけた口調で答えた。啓一はミルクティーをポケットに入れて、休憩所を出た。

結局、水嶋はほんとうにバスに戻らなかった。運転手は啓一を連れだと勘違いしていたらしく、しつこく行方を聞いてきたが、啓一は知らないと答えた。

「困るんだよなあ」と運転手は、ほんとうに困ったように、乗降口の前でしばらく右往左往していた。そして携帯電話でどこかとやりとりを交わしたあと、諦めたのか、ようやくバスを発進させた。

啓一は、上着のポケットからココアとコーヒーとミルクティーの缶を取り出すと、水嶋の座っていた席に、丁寧に並べた。やがて車内灯が消され、あたりはまた真っ暗になった。ココアもコーヒーもミルクティーも、啓一の視界から消える。

前の席の男が、がくんと背もたれを倒してきた。背もたれと座席の間に、また膝が挟まれる。名古屋に到着するまで啓一は、じっとその痛みに耐え続けた。

(了)

(原稿用紙換算：四十三枚)